

幼 児 の 教 育

昭 和 七 年 六 月

心 の は だ。

肥えたる、瘦せたる。顔容とよのへる、とよのはぎる。しかも、どの子の手を握つて見ても、頬を撫でて見ても、かわりなきは、そのはだのやわらかさと滑かさである。なかに、随分よれてゐるのがあつても、よごれたまゝに、やつぱり、やわらかく、すべつこい。

子どもの心のはだも同じである。

それにしても、われ／＼大人の心のはだのなんと荒れてゐることか。自省に洗はれ、道徳に彩られ、作法に塗られてはゐても、心の地はだのなんと粗くなつてゐることか。時には自省と道徳と作法とで却つておしろいやけがして、恐ろしい程がさ／＼になつてさへゐる。

子どものやわらかい手を握り、滑かな頬を撫でる毎に、いつも思はせられるのは、子どものはだにどんなに感じられてゐるだらうかといふことである。まさかに傷け破りはしないまでも、さぞ、さら／＼した心地悪しさを感じさせてゐるだらうといふことである。

それはまあ、ゆるして貰はう。恐るゝのは、心のはだの觸れあひだ。子どもの、あの心のはだに此のがさ／＼した心のはだで觸れることだ。